



# 晩冬の宿



川崎ゆきお

「番頭さん」

「はい」

「番頭で思い浮かべるのは晩冬でねえ」

「はあ？」

「冬の終わりですよ」

「ああ、晩秋はよく聞きますが、晩冬って生まれて初めて聞きましたよ」

「晩秋は薄ら寒く、もの寂しい。人生の黄昏を感じる。これは日本人好みの心境かもしれない」

「でも、晩冬って、まだまだ寒くなるような感じですよ。冬の終わりなのに。その季節、徐々に暖かくなっているでしょ。春がそこまで来ているのですから、もう少し明るい雰囲気ですよ」

「いや、私は晩冬が好きでねえ。それで毎年この旅館へ泊まりに来るんだ。冬の名残を楽しみにね」

「お客さん、暑がりですか」

「いや、寒がりだよ。しかし、冬は好きなんだよね。終わりゆく冬が特に好きだな。決して春なんて感じていない。春の訪れを楽しむんじゃなく、冬の終わりを楽しむんだ」

「では、どんなおもてなしがようござんす」

「ござんすかね」

「はい」

「それって股旅ものに出て来るようなセリフだね」

「いえ、こうして番頭をやってますと、使ってみたくなるのですよ」

「ほう」

「これが当旅館のおもてなしって、感じですがね。まあ、演出ですよ」

「いやいや、そこまでわざとらしけりゃ、OKだよ」

「ようござんすが、わざとらしいですか」

「悪い気はしないから大丈夫だよ」

「それは良かった。私もそれなりに創意工夫しているのですよ」

「余計なことをしなくてもいいのに」

「おもてなしの心ですよ」

「そんなの旅館なら当然でしょ」

「だから、サービスに心がけますって、意味ですよ」

「サービス業なんだから、わざわざ断らなくても、それで普通でしょ」

「はい」

「この旅館高いんだよね。敷居も高けりゃ値段も高い。これでサービス悪けりゃ怒るよ」

「まあ、そうなんですがね」

「それで、よく聞くけど、おもてなしの心って、どんな心なの」

「これは私の説なんですがね」

「ほう、番頭さんの説かい。聞きましょう」

「宿屋って、泊まるでしょ」

「ああ、まあ泊まるよね」

「お休みになるでしょ」

「ああ、寝るねえ。お殿様のような布団でね。敷き布団が二枚ほどある」

「そのとき意識はなくなります」

「おお、いきなり怖いことを」

「仮死状態に近いですよ。これは無防備だ。だから、命を預かっておるのですよ。宿屋は」

「ほう、そこまで考えるかい」

「これはですねえ、旦那さん、飲み食いよりも大切なことなのですよ」

「しかし、寝ると死ぬとは違うでしょ」

「死体ならいいんですよ。もう守る必要はありません。仮死状態だから、厄介なんです」

「しかし、だからといって命を預かるとは大袈裟だねえ。宿屋としては特に何もしなくもいいんだろ。しっかり眠っているかどうか見に来るわけじゃない。そんなことをすりゃ、逆に邪魔だよ。不審だよ」

「そんなことは致しません。しかし、微妙な状態でおられることは心がけています。だからといって何かするわけではないのですがね。また、枕が変わって寝入りにくいのではないかと、心配したりもします」

「それって、死にくってことだね」

「朝起きてこられた姿を見てほっとしますよ。無事に眠られ、無事に起きてこられた。仮死状態から回復されたと」

「仮死状態って、言い方はいけないねえ」

「はいはい、一日一生と言います。お目覚めは誕生のようなものですよ」

「じゃ、赤ん坊の爺さん婆さんもいるか」

「はい、おられます」

「私には分からん」

「これがおもてなしの基本です」

「それはこの旅館の考え方なの」

「いえ、私だけの考えです」

「しかし、まあ、この旅館毎年来てるけど、もてなしがいいのは知ってるよ。サービスがいい」

「あもう」

「何かね番頭さん」

「値段が値段なので、そりゃもてなしますよ」

「そうなの」

「安けりゃ、もてなしませんよ」

「じゃ、おもてなしの心って、お金の心かい」

「はい。実は当方が、もてなされているのですよ」

「え、もてなしてるのは客かい」

「だから、いますよ。もてなされ上手なお客様が」

「しかし」

「何でしょう」

「一番のもてなしはねえ」

「はい」

「こうして話に付き合ってくれることかな」

「それは、暇なので」

「客が少ないの？」

「春まで客は少ないです」

「じゃ、晩冬は狙い目だったんだ」

「はい、暇なので、いくらでもお相手出来ますよ」

「それは有り難い。番頭さん」

了